

日本サウンドスケープ協会

2014年度春季研究発表会プログラム（概要書）



○日時： 2014年6月1日 9:25-13:30

○会場： 東京大学農学部2号館化学第1講義室

〇ごあいさつ

このたびの春季研究発表会は、昨年開催された日本サウンドスケープ協会創立20周年記念行事の成果をさらに発展させてゆくために、今後取組んでゆく研究活動の第一歩となります。さまざまな視点から耳を澄ます多様な研究の「今」を共に考え、その先へと踏み出す機会になりますよう、皆さまのご参加をお願い申し上げます。

2014年度春季研究発表会実行委員長 松本玲子

〇プログラム

9:10 受付開始

9:25 開会挨拶

9:30-10:50 セッション1

9:30 「聴き手の印象に及ぼす影響における自然音とクラシック音楽の差異」(A)

張本裕資(東京大学)・中村和彦(東京大学)・斎藤馨(東京大学)

9:50 「地域の音風景に親しむための仕掛け作り -金沢の水の音風景収集とマップ作成」(A)

土田 義郎(金沢工業大学)

10:10 「Inaka mura(田舎村)の音風景-パラオ現代歌謡に見る音と心」(A)

小西 潤子(沖縄県立芸術大学)

10:30 質疑応答

10:50-11:40 セッション2 卒論報告(フェリス・青学)

10:50 フェリス女学院大学音楽学部音楽芸術学科 2013年度卒業論文概要紹介

「梵鐘の今昔」「弓道の音風景」(A)

船場ひさお(フェリス女学院大学)、古田静佳(フェリス女学院大学)、池田智穂(フェリス女学院大学)

11:10 「レスリングの音風景:レスリングとプロレスリングの比較」(A)

菊池峻(青山学院大学)・鳥越けい子(青山学院大学)

11:30 質疑応答

11:40

<休憩>

12:00-13:10

セッション3

12:00 -瀧廉太郎記念館リニューアル・デザイン (B)

鷺野宏(鷺野宏デザイン事務所)・鳥越けい子(青山学院大学)

12:15 ガーデン・ナノのサウンドスケープ・デザイン ~音を発しない音のデザイン~ (B)

曾和治好(京都造形芸術大学)・岸田 朗(京都造形芸術大学)

12:30 映像と音のアーカイブを活用した自然体験の質的向上 (B)

中村和彦(東京大学)・藤原章雄(東京大学)・斎藤馨(東京大学)

12:45 質疑応答

13:10-13:25

セッション4 全体討論

13:25 閉会挨拶

※()内は発表形式

※会場は本郷キャンパスと言問通りを隔てて陸橋でつながっている弥生キャンパス内にあります。

東大前駅(地下鉄南北線)徒歩1分

本郷三丁目駅(地下鉄大江戸線)徒歩10分・本郷三丁目駅(地下鉄丸ノ内線)徒歩12分

講演要旨

聴き手の印象に及ぼす影響における自然音とクラシック音楽の差異

張本裕資 (東京大学)、中村和彦 (東京大学)、斎藤馨 (東京大学)

自然音には、川のせせらぎの音や木が葉を揺らす音、鳥のさえずりなどがある。これら自然音を連想させるものとして、クラシック音楽が挙げられる。例えば、クラシック音楽の曲名には、自然を連想させる言葉が用いられている事が多い。ヴィヴァルディ「四季」やショパン「前奏曲第 15 番変ニ長調〈雨だれ〉」、ヨハン・シュトラウス 2 世「美しく青きドナウ」などが挙げられる。同様に、ベートーヴェン「交響曲第 6 番〈田園〉」第 2 楽章やドヴォルザーク「交響曲第 9 番〈新世界より〉」第 2 楽章のように、楽曲の中に鳥のさえずりを連想させるものもある。このように、クラシック音楽と自然音の間には、様々な相関性があると考えられる。クラシック音楽における音楽様式は、作曲者や年代によって異なっているが、その要因のひとつとして、人が生まれながらに持っている「自然の気質」や「自然の傾向」および、その人が育った土地の地理的・風土的な因子がある。例えばドイツの場合、大部分が冷涼な気候であり、これは重々しい低音が特徴的な音楽様式に結びつくと考えられる。また、日本と類似した四季の変化の気候が特徴のフランスの場合、舞踏的で移ろいのある音楽様式であるとされている。

このように、クラシック音楽は感覚的や風土的に自然音との関わりを見いだせると考えられる。

近年、都市化が進むに伴い、都市部における人々の自然体験が減っていることが問題となっている。そこで、クラシック音楽と自然音に相関性があると考えた場合、クラシック音楽が自然体験の一部を擬似的に代替できる可能性が考えられる。しかし、どの部分を具体的に代替しうるかを検討するための知見が現状では不足している。そこで本研究では、聴き手の印象に及ぼす影響における自然音とクラシック音楽の差異について、自然体験のどの部分を代替し得るかという視点から検討することを目的とする。

本発表では、予備実験について報告する。被験者に自然音とクラシック音楽とを聴かせることで、クラシック音楽と実際の自然音の間で印象が変化するかどうか、あるいはその感想や反応に違いがあるかどうかを検討した。実際にその音を聴いて快く感じるか、あるいは不快に感じたか、自然を連想させるかどうかなど、いくつかの形容詞対を用いた印象評価を行った。

地域の音風景に親しむための仕掛け作り -金沢の水の音風景収集とマップ作成-

土田義郎（金沢工業大学）

金沢市の町並みを構成する大きな要素として、都市の骨格を形作る河川や数多く残る歴史的遺産としての用水があげられる。当初の用水には、城下町であった金沢の防火や防衛、物資運搬、灌漑等の機能的な役割があったが、現在はその景観が観光客や住民の心にもたらす安らぎや潤いのような心理的な効果も無視できない。美しいまちは、住民の幸せともつながっている。

金沢市は景観保全のために歴史的建造物、用水に対して保全・活用の取り組みを行っている。散策マップはいくつか存在しているが、一般の方々が普段気づきにくい音風景に対しても、興味と愛着を持ってもらえるような仕掛けがない。水の流れは見ていて飽きないだけでなく、その音は人の心を和らげる。水辺の織りなす音風景は、ふと足を止めて解き放たれた心持ちになれる瞬間を創り出す力がある。それは地域の人々にとって常に身近にある当たり前の存在でありながら、歴史を経ることで特別なものになっている。いわば、都市のアイデンティティなのである。

このような視点から水音を取り上げ、楽しくまちめぐりを行うことができるようなマップ作成を試みた。A2 サイズの紙に両面印刷で、2つの河川と3つの用水（浅野川、犀川、鞍月用水、辰巳用水、大野庄用水）周辺の音風景を示し、同時に寺社などの建造物についても示した。全体図や、用水に関する豆知識、まち歩きの出発点・終点付近のバス停に関する情報といったものも掲載している。

今、各都市ではまち歩きのイベントがひそやかなブームになっている。「まいまい京都」、「大阪あそ歩」、「東京てくてく」、「長崎さるく」など、多くの都市でまち歩きツアーが企画されている。単に名所を観て、名物を食べるだけの観光は終焉を迎えつつある。お仕着せの観光に飽き足りない人々が、まちの中のちょっとときめく面白いものを見つけたらと思って動き出している。この散策マップも、そのような小さな楽しみを引き出すことを狙いとしている。

Inaka mura（田舎村）の音風景—パラオ現代歌謡に見る音と心

小西潤子（沖縄県立芸術大学）

パラオ共和国は、戦前日本統治下において南洋庁が設置された南洋群島の政治的中心であった。当時から日本の大衆文化が深く浸透していたが、現在でもその影響が色濃く残っている。音楽的にも歌詞の面でも日本の流行歌を模

して創作された現代歌謡・デレベエシールは、日本語を話さない若者世代にも継がれている。この音楽ジャンルは、日本の流行歌や日本経由でもたらされた洋楽（ポップス）のメロディが部分的または全体に借用されていたり、それらを参照してメロディが創作されていたりする。また、日本語の使用は、単語レベルから歌詞全体にまで至る。

しかしながら、これまでデレベエシールの収集やまとまった研究は行われてこなかった。その理由として、1) パラオ人は歌詞の書き留めはできても、五線譜の読譜や採譜が浸透していないこと、採譜ができる外国人がいたとしても、パラオ語の歌詞を五線譜上に割り振れる聴き取り能力がないこと、3) そもそも1 つの曲目に対するタイトルが一定しておらず、音源と歌詞とを同定できないこと、4) 外国人にとっては、パラオ語の意味がわからないこと、5) 短期間に訪れる外国人には歌詞や音源の入手が難しいこと、などがあげられる。

発表者は平成 23～26 年度科学研究費の助成を受け、こうした課題を1 つずつ解決してきた。そして、200 曲以上と数えられるデレベエシールのうち、少なくとも 45 曲の歌詞付き採譜と日英翻訳、そのうちの 15 曲のオリジナル録音を添えたウタホン utahong として集成し、年度内の完成を目指している。本発表では、その作業過程において明らかになったデレベエシールの歌詞の中で描かれた音風景に注目する。デレベエシールのほとんどが、恋愛をテーマにした曲であり、しかもそのすべてが失恋に関する「恨み歌」であるといってよい。つまり、デレベエシールは幸福であった過去の出来事や場所、日時を回想し、ときには裏切った相手の個人名を示唆するイニシャルやニックネームを歌詞に組み込むことで人々の共感と涙を誘い、次の世代に「人の道として」の教訓を与えるものなのである。国土の総面積が 488 平方キロメートルと屋久島ほどのパラオに生まれ育った人々は、歌を聴くことでその音風景を再現して感じ取ることができる。パラオの Inaka mura 田舎村では、どのような音が聴こえ、人々はどのように感じ取るのか。ここでは、パラオの音風景と悲恋のストーリーを紹介する。

フェリス女学院大学音楽学部音楽芸術学科 2013 年度卒業論文概要紹介「梵鐘の今昔」「弓道の音風景」

船場ひさお（フェリス女学院大学）、古田静佳（フェリス女学院大学）、池田智穂（フェリス女学院大学）

「梵鐘の今昔」

長野県にある曹洞宗の寺の住職の娘として生まれ育った古田は、船場の授業でお寺の鐘が場所や人によっては騒音

として捉えられていることを知り、大きな驚きを感じた。自分にとっても日本人にとっても親しみのある音と思って来た鐘の音について、深く調べてみたいということから研究が始まった。長野県松本市近辺の8ヶ寺で住職にインタビューを実施した。

この結果、(1)全ての寺が一度は供出をしている (2)除夜の鐘は必ず行い、近所の方々が毎年来られる (3)人数は増加傾向にある (4)騒音だという苦情はない (5)全ての寺が時報の鐘を鳴らしている という回答が得られた。

除夜の鐘は一大イベントであり、どの寺でも昔より撞きに来る人が増えている。特に若い年代が増え、増加傾向にある現在の状況に至るまでの寺独自の工夫や苦勞も話の中から感じる事が出来た。

騒音問題についての話は出てこなかった。しかし、住職たちがこの問題について日頃から考え、感じていることがあることは実感できた。

「弓道の音風景」

池田は2012年度日本サウンドスケープ協会秋季研究発表会に参加した際、青山学院大学の学生による『野球の音風景』という研究発表を聞いた。応援団やブラスバンド等、応援の音は選手たちの精神面に良い影響を与えるため、選手たちが必要としている音であるということや、応援により試合の流れさえも変わってくるという興味深い内容であった。野球の音風景と比較してみると、池田が好きなスポーツである弓道には賑やかな応援はない。野球では選手に悪影響を与えてしまうという、「無音」の場面が弓道には非常に多い。

池田は3つの道場と他大学弓道部、計43名にアンケートを配布し、ほぼ100%の回収率で回答を得た。ここから弓道ならではの精神性の高さや静寂を重んじる意識が見えて来た。戦後武道はスポーツ化し、国際化を進めてきたが、相手が人ではなく物的である弓道は試合で勝つことよりも自分自身の精神を鍛えるという目的が薄れにくかったものと思われ、ここから柔道や剣道に比べてスポーツのような賑わいのある声援がないのではないかと考えられる。また「礼」などの武道文化に育った心の静けさが、人の話し声を邪魔なものだと感じ、張りつめた空気を好むのであろう。射手は心臓の音や呼吸の音が聞こえるくらいに静かな空間が良いと感じている。

レスリング音風景～レスリングとプロレスリングの比較研究～

菊池 峻（青山学院大学）、鳥越けい子（青山学院大学）

青山学院大学はスポーツに優れた学生の指導に力を入れており、総合文化政策学部在籍する学生にもそうした者が少なくない。そのため、鳥越研究室ではこれまでもゼミ生である野球やバスケの選手たちと、それぞれのスポーツをフィールドとしたサウンドスケープ調査研究の可能性を探ってきた。そうしたなか、本発表は2013年度の卒業論文より「レスリングの音風景」を取り上げた研究を報告する。

小学校で柔道を習っていた菊池は、その強化訓練の一環として、中学一年次にレスリングに出会った。以来、高校三年間で団体の日本一、個人では全国優勝、上位入賞を何度も経験する等、自らの成長は常に熱心に取り組んできたレスリングと共にあると自覚している。

本研究の目的は、古代ギリシアに遡り現在のオリンピック競技種目のひとつとなっている「競技レスリング」の音風景と、19世紀のイギリスとアメリカで初めて行われたとされる「プロモーション（あるいはプロモート）レスリング」の略称である「プロレス」の音風景との違い、および共通点を明らかにすることである。そのためにはまず、「レスリングの音風景」を構成する音には「審判の発する音や声」から「選手のシューズの音やマットに相手を倒したときの音」「会場の応援やアナウンス」に至る、さまざまな種類のものがあることを理解した。次に、「競技レスリング」の事例として、国民体育大会東京2013と全日本学生レスリング選手権における試合（菊池自身が2013年度に参加したもの）の記録と、青学レスリング部出身のプロレスラー（中邑真輔）が出演する試合（新日本プロレス対全日本プロレス）の記録を分析・比較した。

その結果、プロレスには、選手が入場するときの音楽、選手自身が発する雄叫び、乱闘の音等があるのに対して、競技レスリングにはそれらの音が無い（選手が声を発すること自体が許されていない）等、両者の間には大きな違いがあることを確認した。一方、審判が判定を下すときに床を叩く音は、両者に共通する貴重な音であることが明らかとなった。

一方、当初「プロレスはレスリングとは似て非なるものである」と考えて菊池が、本研究を遂行することによって、プロレスに対するシンパシーを覚えるようになったという予期せぬ展開もあった。

瀧廉太郎記念館リニューアル・デザイン

鷺野宏（鷺野宏デザイン事務所）、鳥越けい子（青山学院大学）

この発表は、2013 年度に竹田市（大分県）の依頼を受けて実施した「瀧廉太郎記念館リニューアル・デザイン」について、そのプロジェクトの経緯、サウンドスケープ・デザインとしての位置づけと意義と共に、その内容と手法を映像資料によって紹介するものである。

瀧廉太郎記念館は、平成4 年に開館した竹田市の施設。「荒城の月」の作曲家として知られる瀧廉太郎が明治24 年12 月の半ばから約2 年半、家族と共に暮らした「旧宅」を、母屋は「復元」の手法が用いられているが、庭園部分は鳥越が担当し、来館者が廉太郎が日々体験していた音風景を迫体験できるようにするというコンセプトをもとに新たにデザインしたもの。20 年の年月がたちコンセプトと実際のしつらえの間に深刻なズレが生じていたため、今回のリニューアルが必要となり、鳥越の監修のもと、鷺野がそのデザインを担当した。

いつの頃からか玄関近くに導入されていた解説用テレビモニターを、庭奥の蔵のスペースに移動することによる演出音の引き算をしたり、館内に所狭しと並べられていた展示ケースを取払い、廉太郎に思いを馳せるのに必要な資料を整理・厳選し、それらをいくつかの新たな工夫をもって展示するようにした。そこに身を置く人の自由な感性を引き出すことに重きを置いて、博物館・資料館のような資料解説は極力避けつつ、廉太郎の気配を感じ取れるように和室や縁側に腰を下ろしてゆっくりと過ごすことを促すよう心がけた。また、風が吹けば揺れる垂れ幕に展示解説をしたり、玄関から入るとライトアップされた什器やプロジェクションなど新しいしつらえをした暗い空間を経て、ふたたび自然な光に満ちた和の空間へ至ることで、より鮮やかにあたりまえの世界を感じ取ってもらうための仕掛けをつくるなどした。

また、当初のサウンドスケープ計画のなかに含まれながら、これまで知られることのほとんどなかった「音楽家・瀧廉太郎を育んだ竹田の環境に思いを馳せながら、ここから廉太郎の視点で竹田のまちを歩いてもらいたい」というコンセプトについても、来館者により明確に伝えることにより、今後この施設を拠点とした新たなまちづくりプログラムへの提案につなげようとしている。

監修：鳥越けい子 設計：鷺野宏（鷺野宏デザイン事務所） 施主：大分県竹田市

ガーデン・ナノのサウンドスケープ・デザイン ～音を発しない音のデザイン～

曾和治好（京都造形芸術大学）、岸田善朗（京都造形芸術大学）

デスクトップ・ガーデンとは、机の上に置くことができる庭を意味する。我国には坪庭という文化があり、小さな敷地に広大な自然観が表現される。デスクトップガーデンは、坪庭をさらに推し進め、机上に庭園を創作し、創作者の自然観を小さな庭園として表現しようとするものである。2014 年度ミラノ・サローネにおける Secret gardens 展では、7 名の日本人デザイナーおよび 12 名のイタリア人デザイナーにより初のデスクトップガーデン国際展が開催された。ガーデン・ナノはデスクトップガーデンの一種で、2009 年からミラノ・サローネやパリ・デザインウィークにおいて継続的に発表されている作品である。

10cm×10cm×6.2cm のアクリル製の小さな容器には、枯山水庭園で水を表現する庭園素材である白川砂が満たされ、その中に 64 個の青色 LED マトリクスが埋め込んでいる。これらの LED は CPU によって制御され、水面を表現する波紋状の光が、サウンドセンサーによりトリガーされる。静けさが一定期間継続すれば青い光は消え、近くで音が聞こえれば波紋状の青色光が白川砂の中に浮かび上がる。つまり一定以下の環境音レベルが継続すれば、LED は消灯し、単なる白い砂の集合体でしかないが、環境音や話し声など小さな音がセンサーに反応すれば、ゆっくりと波紋状の光が動き出すこととなる。

この作品は音を全く発しないが、このような音の有無による光の反応を利用して、環境音への意識を喚起することが意図されている。かつてジョン・ケージによる「4 分 33 秒」では休符が演奏され、様々な騒音や環境音もまた音楽であることが示された。さらに鳥越によって、詩仙堂の「ししおどし」もまた無音部分において環境音を楽しむ庭園の音具であることが指摘されている。このような無音のサウンドスケープの延長として、ガーデン・ナノにおいては、伝統的な枯山水様式に、現代的な CPU 制御の LED マトリクスを埋め込み、さらにそれらを音センサーによりトリガーすることにより、無音による音のデザインに取り組んでいる。

映像と音のアーカイブを活用した自然体験の質的向上

中村和彦（東京大学）、藤原章雄（東京大学）、斎藤馨（東京大学）

近年、子どもの自然体験の機会が減少しており、機会そのものを増やすとともに、数少ない機会の質を向上することも求められる。自然が発する情報は多種多量であり、自然体験の質的向上においては、人間の五感を存分に活用してその情報を収集することが望まれる。しかし、五感を鋭敏にすることは決して容易ではなく、数少ない自然体験の機会の中で得られる情報には限りがある。そこで、自然体験の対象となるフィールドの感性情報を映像や音という形で記録蓄積しておき、自然体験の前後において映像や音の視聴によって自然の情報を獲得することで、自然体験の質を補完的に向上できると考えた。

発表者らが推進する東京大学サイバーフォレスト研究プロジェクトでは、東大附属秩父演習林をはじめ、全国6地点において、映像と音の記録蓄積を行っている。これらのアーカイブは Web 上に公開しており、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの元で広く活用されることを求めている。本発表では、自然体験の質的向上に関する事例をもとに、このアーカイブを用いた教材コンテンツを紹介する。

6地点のうちの1つ、信州大学志賀自然教育園で、1987年から撮影されている写真データおよび2012年から録音されている音声データを用いて、現地で体験学習を行った中学生の事後学習を行った。その結果、音声データのアーカイブによって、中学生が現地では意識して聴くことがなかった自然音、とりわけ鳥の鳴き声など主に動物が発する音の存在を、中学生は確認することができた。音は、刻々と移ろうものであり、自然体験学習の中で意識的に聴くことは困難であるが、アーカイブによってこの点を補完できることが示唆された。一方で、映像データのアーカイブによって、中学生が現地では確認が難しかった長期間にわたる自然の移ろい、とりわけ植物の季節変化が年ごとに異なることを、中学生は確認することができた。自然の長い時間にわたる変化は、いつときの自然体験では到底実感できないものであるが、アーカイブによってこの点を保管できることが示唆された。